

郷土文化資源の顕彰と観光資源への転用

渡邊 太¹ (Futoshi WATANABE)・岡田 有美子² (Yumiko OKADA)

鳥取短期大学国際文化交流学科¹ 明治大学大学院理工学研究科²

【目 的】

申請者は2018年度から2020年度にかけて、鳥取中部の郷土芸術史の調査を実施した。その成果として、鳥取の地に近代美術の営みを定着させた砂丘社の活動、鳥取の医師・吉田璋也を介して柳宗悦、河井寛次郎、棟方志功らと交友した長谷川富三郎、徳吉英雄、吉田たすくらの民藝運動、塩谷定好・高木啓太郎をはじめとする写真家たちの活動など、ジャンルを超えた幅広い芸術活動が20世紀を通じて展開したこと、そして郷土作家の作品が市中で親しまれていることが鳥取中部の貴重な文化資源であることが示された。その一方で、世代交代が進むにつれて俄に記憶の継承の問題に直面していることに危惧も覚えた。

本研究では、これまでの研究成果をふまえた上で郷土の芸術を再評価し現代的視点からの顕彰を試みるとともに、これら郷土の文化資源を観光資源として転用し観光産業の振興に寄与する可能性を探る。

【内 容】

1. 地域文化観光論の枠組み

地域の文化資源は、地域住民にとって慣れ親しみすぎると「当たり前」のものとして意識されなくなるが、外部から訪れる観光者のまなざしは、地域の文化資源を発見し改めて価値を見直す機運を醸成する。そして観光者のまなざしを通じて、地域住民も文化資源の価値を見直す。本研究では、文化をめぐる様々な立場の相互作用を重視する「地域文化観光論」¹⁾を理論的枠組みとして、鳥取中部の芸術的文化資源を観光資源に転用する方法を検討する。

人類学者・橋本和也によれば、異郷の文化に対して真正性の価値を期待しつつ一時的・非日常的に消費する「大衆観光」は、大衆化の拡大による真正性の喪失という問題に直面する。わかりやすくいえば、観光産業の拡大に伴い地域の文化が観光客向けに上演されるものとなり本来の文脈から切り離された結果、観光客にとってもさほど魅力が感じられないものになってしまう。ポストモダンの観光者は、真正性が不可能であることを認識しながら真正性を求める矛盾を抱えるのだ。

こうしたポスト大衆観光時代の観光を考察するために、橋本は「地域文化観光」という概念を提示する。橋本は地域文化観光について以下のように説明する。「地域の人々が発見し、新たに創造し、場合によっては他地域から借用してきた、一見『まがいもの』のように見えるかもしれないモノを、熱心に育て上げて『ほんもの』にした『地域文化』を発信するのが『地域文化観光』である」²⁾。

橋本によれば、『地域文化』とは、その地域に伝統的に所与のものとして存在するものではない。地域の人びとが発見・創造し、育てあげたものが『地域文化』である³⁾。そして、「地域文化」には「地域性」が反映されるが、その「地域性」も所与のものではなく構築過程を経て創造されるものである。「地域文化観光」では、20世紀にマスツーリズムとして発展した「大衆観光」において期待される真正性とは異なる種類の真正性が期待される。すなわち、観光者と地域の人々の相互作用により構築された真正性である。観光者と地域の人々の真摯な出会いが、相互主観的な真正性の構築に寄与する。

真摯な相互作用を経て構築された真正性においては、対象となる「地域文化」が地域の「伝統」そのものであるかどうかは二次的なことである。むしろ現在の文脈において地域の人々が何を地域の「伝統」として捉え発信するのか、その際にいかに真摯に取り組むかが重要となる。その意味で「地域文化観光論」は、①必要なものの取捨選択、②選択したものと既存の伝統を折り合わせる解釈図式の発明、③発明した図式を伝統として統合、という3段階をたどる「伝統の発明」⁴⁾の議論と共通する。地域の人々が主体的に地域の資源を再発見し「伝統」として発明する過程に注目することで、新たな「地域文化」の可能性を検討することができる。

2. 民藝の現代的意義と地域性

本研究では、鳥取中部から発信すべき文化資源として、民藝に着目している。民藝は、無名の工人たちが制作した日用品の美しさに着目した柳宗悦らが提示した概念である。柳らは民衆工芸に、実用品であるがゆえに装飾的な芸術には見られない素朴で力強く健康な美しさを見出した。

柳らが提唱した民藝の再評価は、過去に幾度も繰り返されたが、近年また民藝再評価の機運が高まっている。消費社会が高度に発展する中で身の回りの生活の価値を見直す民藝への注目が集まる現状について、哲学者の鞍田崇は、「親密さ」や「いとおしさ」を意味するインティマシー(intimacy)概念をキーワードとして民藝の現代的意義を論じている。鞍田は、「無印良品」などのデザイナーを務めた深澤直人が日本民藝館館長に就任したことを象徴的な出来事として捉え、インティマシーをデザインすることに民藝の可能性を見出している⁵⁾。

また、本研究との関連で重要なのは、民藝が地域性と深くかかわることである。柳は、民藝運動を開始した頃から全国各地で営まれる手仕事の調査に着手し、戦時下に『手仕事の日本』としてまとめる作業に取り組んだ。戦後、出版された『手仕事の日本』において柳は、「こんなにも様々な気候や風土を有つ国でありますから、植物だとして驚くほどの種類に恵まれます。人間の生活とても様々な変化を示し、画地の風俗や行事を見ますと、所に応じてどんなに異なるかが見られます。用いている言葉だとして、それぞれに特色を示しております。これらのことはやがて各地で拵えられる品物が、種類において形において色において様々な変化を示すことを語るでしょう。いわば地方色に彩られていないものとはありません」⁶⁾と述べ、郷土の工芸品が必ず「地方色」に彩られていることを強調している。

ちなみに、『手仕事の日本』には山陰地方の手仕事として、石見喜阿弥窯、石州半紙、岩坂雁皮紙、布志名窯、袖師窯、日出団扇、牛ノ戸焼、因幡紙などが紹介され、倉吉絣についても言及されているが、「絣といえば『倉吉絣』を思い起しますが、これも残念なことにほとんど歴史を終わりました」⁷⁾と述べられている。しかしながら、柳に勧められた長谷川富三郎が『工藝』に「倉吉絣四季」を執筆、その後、吉田たすく、福井貞子が研究を重ねる営みを通じて技法が継承され、倉吉絣保存会、鳥取短期大学絣研究室・絣美術館の営みへとつながっている。手仕事 that 失われつつある危機意識をもって柳が執筆した『手仕事の日本』は、間接的に倉吉絣の継承を促したと言える。

3. 鳥取の観光資源としての民藝

鳥取では、医師・吉田璋也が「民藝のプロデューサー」を自認し新作民藝運動を牽引したことがよく知られる。鳥取東部では鳥取民藝美術館を中心に、吉田璋也の理念を受け継ぎ民藝振興に取り組む。2021年10月から東京国立近代美術館で開催された「民藝の100年」展においても鳥取における吉田の取り組みが紹介されている。また、新鳥取駅前太平線通り商店街では2021年10～11月に民藝イベント「みんげいみつけ！」が開かれるなど地域活性化に民藝が活用されている。

鳥取中部では、吉田璋也を介して民藝の創始者たちと出会った長谷川富三郎が小学校教員を務めながら版画制作に励み、鳥取中部の民藝振興に貢献した。鳥取中部では、敗戦直後に民藝同人誌『意匠』を発行した徳吉英雄、倉吉絣を研究した染織家・吉田たすく、民藝店を経営した写真家・高木啓太郎など、郷土では著名な作家たちが活躍した。民藝に携わる人々が集うサロンの場と

しても機能した古美術・民具店「山陰民具」の存在感も大きい。さらに上神焼、国造焼、福光焼、倉吉焼など陶芸の窯も充実している。2021年に逝去した仏師・山本竜門の木彫りの仏像も優れた民藝的価値を有し市内各所で市民に親しまれている。

鳥取中部の民藝運動においては、近代美術を志向した総合芸術団体・砂丘社とも人脈が交差し、塩谷定好や植田正治など写真家たちとも交流したことがわかっている。作家たちがジャンルを超えて交流していたことが鳥取中部の芸術活動の特徴と言える。本研究では、個別の作家や特定のジャンルに焦点を絞るのではなく、領域横断的な交流を通じて民藝が振興されたこと自体を誇るべき地域文化として顕彰し、次世代へ継承したいと考えている。

この観点を観光に繋げるためには、人と作品、そして作品の題材となった地域の自然と風土、これらを複合的に観光資源として捉え開発することが必要である。そして、かかる営みを行う際には、先人たちの営みに倣い民藝的な姿勢で遂行することが大事である。それが文化に対する「真摯さ」となる。先に紹介した鞍田の表現を借りれば、インティマシーをデザインする態度を確立しながら観光資源の開発に取り組むことが肝要である。

とはいえ現状を見ると、鳥取中部の民藝を観光資源とする機運はいまだ乏しいように思われる。敗戦後から民藝に携わった先人たちを直接知る世代が少なくなるにつれて、先人たちが残した作品も消失の危機に陥りつつある。地域文化の継承が途切れつつある今、早急に地域文化の顕彰に着手しなければ、市中で長谷川富三郎の版画や高木啓太郎の書画、あるいは竜門仏を当たり前のように目にすることができている現在の光景もいずれ失われることが強く懸念される。

2025（令和7）年春、倉吉市に開館予定の鳥取県立美術館には大きな役割を期待したい。その一方で、過去の民藝の動きに倣う観点からすると、公共文化施設の動向と同時進行で無数の小さな民間の取り組みが並走することが望ましい。大きな動きの駆動力は重要であるが、同時に民藝の理念からすれば小さなものの小さな力が各所で分散的に持続することがいっそう大事だからである。

<参考文献>

- 1) 橋本和也『地域文化観光論』ナカニシヤ出版、2018年。
- 2) 前掲1) p. v.
- 3) 前掲1) p. 24.
- 4) 塩原勉『転換する日本社会』新曜社、1994年。
- 5) 鞍田崇『民藝のインティマシー』明治大学出版会、2015年。
- 6) 柳智悦『手仕事に日本』岩波書店、1985年、pp. 19-20.
- 7) 前掲6) p. 193.

成 果

本研究の成果は、以下の研究業績として公表した。

- 渡邊 太（2021）『『裏日本』と『環日本海』の視点』パネルセッション「鳥取から『裏日本』を再考する」（オーガナイザー：G・アレクサンダー）Cultural Typhoon 2021（カルチュラル・スタディーズ学会）金沢21世紀美術館（オンライン発表）。
- （2022）「創造的観光人材育成プログラム始動——国際文化交流学科における観光の学び」『鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年報』第5号、pp. 19-25.
- （2022）「鳥取中部地方芸術文化史を探る（仮）」『ソシオロジ』第204号、頁未定、印刷中。